「濎漾」とは「小水之貌」なのか

――「梁弱水之濎漾兮」――

遠藤星希

【おおよその解釈】

「漂龍淵而還九垠兮、窺地底而上回。風從從而扶轄兮、鸞鳳紛其御蕤。梁弱水之濎漾兮、躡不周之逶蛇。（龍淵に漂かびて九垠を還り、地底を窺ひて上に回る。風は從從として轄を扶け、鸞鳳は紛として其れ蕤に御る。弱水の濎漾たるに梁かけ、不周の逶蛇たるを躡む。）」

龍淵に浮かんでから、その九層構造の中を駆けめぐり、地の底を窺い見てから上に帰る。風はびゅうびゅうと吹いて車輪の進行を助け、鸞や鳳は数多く入り乱れながら、車に垂れ下がった綏に乗る。「濎漾」として流れる弱水に橋を架けて渡り、「逶蛇」たる不周山を軽々と攀じのぼる。

このうち、「梁弱水之濎漾兮」について解釈する。

【校勘】

日鈔本[1]、『文選』では「漾」を「淡」に作る。

【旧注・旧説の整理】

（1）顔師古注引服虔注…「昆侖之東有弱水、度之若濎漾耳（昆侖の東に弱水がある。これを「濎漾」であるかのように渡るのである）。」

（2）顔師古注…「濎漾、小水之貌。不周、山名。逶蛇亦言不艱難也（濎漾とは小さい川の様子である。不周は山の名である。〔濎漾と同じように〕逶蛇もまた〔不周山を踏み越えるのが〕困難でないことを言っているのである）。」

（3）李善注…「濎漾、小水貌也。字林曰、漾、絶小水也。……逶蛇、欲平貌也（濎漾とは小さい川の様子である。『字林』に「漾とは非常に小さな川なり」とある。……逶蛇とは、ほとんど平らにならんとする様子である）。」

（4）呂向注…「濎漾、不流貌（濎漾とは、澱んで流れない様子である）。」

（5）Knechtges 注…「The rhyming binome *tingying* 濎漾（*thieng-ghjiweng*）describes small amounts of water. I suspect that the signific is *ting*, which probably represets *ting* 渟（stagnant）. For variants, see Zhu Qifeng, *Citong*, p.1561. I have rendered it as "shalllow shoals" to fit this context.（畳韻語の「濎漾」は、少量の水を描写している。その重点は ting にあり、恐らく「渟（水が流れない、澱む）」を意味するのではないかと思われる。「濎漾」の通用語については、朱起鳳『辞通』一五六一頁を参照。私は「濎漾」を、前後の文脈に合うように「浅瀬」と訳した）。」

（6）花房英樹訳…「弱水の小さな流れを一飛びに渡り、不周のうねうねと続く峰を越えて西の果てに至り」

（7）中島千秋訳…「こうして、弱水を、浅い川を渡るようにのり越え、不周山をも、ゆるやかな丘同然にふみ越え」

【問題提起】

古今を問わず、各家ほぼ一致して「濎漾」を「小さい水の貌」と解釈する。この解釈の当否について検討する前に、「弱水」が如何なる川であるのか、確認しておく必要があるだろう。

弱水には、大きく分けて張掖郡刪丹県にある弱水と、金城郡臨羌県にある弱水との二種類がある。前者は『史記』「夏本紀」や『漢書』「地理志」張掖郡刪丹県の原注などに記述のある弱水であり、禹王がその流れを導いて酒泉郡の合黎山に至らせたと『尚書』「禹貢」に記されている。それに対して後者は、『山海経』[2]や『漢書』「地理志」金城郡臨羌

県の原注[3]などに記述のある弱水であり、崑崙山を取り巻いて流れているのが特徴である。「甘泉賦」の「弱水」については、渡った直後に、崑崙山に住むという西王母が登場することから、後者の弱水であると考えてよい。

まず言えるのは、弱水の流れが激しい、或いは穏やかであるといった類いの記述が管見の限り見当たらないという点である。弱水の属性として、流れの強弱は本来的に附与されていないようだ。代わって強調されるのは、浮力の小ささである。『山海経』の郭璞注に「其水不勝鴻毛（その水は鴻毛さえも浮かべることができない）」とあることから、舟を浮かべるのがおよそ不可能なことは明白である。崑崙山とは関わりがないが、やはり鴻毛が浮かばない弱水が『海内十洲記』「鳳鱗洲」にも見える。[4]同書の「聚窟洲」には、月氏国からの使者の言葉として「中國時有好道之君。……奇蘊而貢神香。歩天林而請猛獣、乗毳車而濟弱淵、策驥足以度飛沙。契濶途遥、辛苦蹊路、於今已十三年矣（中国には時に道を好む君主がいらっしゃるとのこと。……だから秘蔵品を探して神香を貢ぐことに致しました。中国に行くために、天林を歩いて猛獣に出くわし、毛車に乗って弱水の淵を渡り、千里の名馬に鞭打って流沙を渡りました。路の遠いのに苦しみ、道の悪いのに辛苦し、すでに十三年も経ってしまいました）」とある。ここで強調されているのは、月氏国から漢に至るまでの道程の厳しさであり、弱水は天林・流沙とともに通過するのが困難な地として言及されている。

ここで話を「甘泉賦」に戻そう。「梁弱水之濎滌兮」に関して言えば、本来渡るのに非常な労力を要する弱水をもいともたやすく渡ってしまった、というのが、この句のこころである。そこには異論はなかろう。ただ「濎滌」を「小さい水の貌」ととり、小さな川をひと跨ぎするように弱水を渡ったとする諸家の解釈は果たして妥当であろうか。

もしそのように「濎滌」を「小さい水の貌」と解釈するのであれば、後句「躡不周之逶蛇」の「逶蛇」も、対句の関係上、「山のゆるやかなさま」を形容する言葉でなくてはならぬ。そうでなくては、「不周山をも、ゆるやかな丘同然にふみ越え」という解釈にたどりつけない。しかし「逶蛇」には、顔師古の言う「不艱難」、或いは李善の言う「欲平貌」、すなわち越えるのに困難を伴わないゆるやかな様子を意味する用例が見当たらないのである。

「逶蛇」と、そのヴァリエーション「逶迤」・「逶迤」「逶蛇」（weily2・「逶」『広韻』於為切／「蛇」『広韻』弋支切）はいずれも音義を同じくし、基本的な意味は、「古詩十九首」其十二の開頭部「東城高且長、逶迤自相屬（東城高く且つ長し　逶迤として自ら相属なる）」に対して、李善が『楚辞』の王逸注「逶迤、長貌也」を引くように、「うねうねと長く続くさま」である。だが「逶蛇」には、後述するように「険しい貌」を形容する用例も見られる。そうである以上、「濎潒」の解釈を見直す必要が生じるだろう。

ここで確認しておきたいのは、漢賦には「弸環」「葳蕤」といった類の擬音語・擬態語が頻出する点、そしてそうした言葉は、いま取り上げている「甘泉賦」の両句においても、テキスト間で「濎潒」と「濎潒」、「逶蛇」と「逶迤」という風に文字の異同が見られるごとく、用いられている文字はさほど重要ではなく、むしろ音の方から意味が紡ぎ出されるもの、という点である。

朱起鳳の『辞通』は、そうした漢字二文字からなる同音語、類音語を集めて韻ごとに分類し、訓詁と用例を附した辞書であり、Knechtges氏の指摘するように、その巻十五には「濎潒」（ding3ying2・「濎」『広韻』都挺切／「潒」『広韻』余傾切）のヴァリエーションというべき同音あるいは類音の語が全部で九種類挙げられている（内訳…「濎潒」「渟瀯」「渟潒」「汀瀯」「汀潒」「湏濘」「汀濘」「濎濘」「洴潒」）。[5] 朱起鳳はこれら全てを「小水也」とする。挙げられている用例を一つ一つ見ていくと、なるほど、確かに大部分が小さな川や水溜りを形容している。[6] だが中には、小さい水や川を形容したとは、とても考えられない用例もいくつか含まれているのである。以下、そうした用例を分析することにより、「甘泉賦」における「濎潒」と弱水の関係を探ってみたい。

【用例・考察】

〔用例①〕湏濘（ding3ning2・「湏」『集韻』都挺切／「濘」『集韻』囊丁切）

木華「海賦」（『文選』巻十二）に「驚浪雷奔、駭水迸集。開合解會、瀼瀼濕濕。葩華踧沮、澒濘潗瀉。（驚浪は雷奔し駭水は迸集す。開合解會し　瀼瀼濕濕たり。葩華踧沮し　澒濘潗瀉たり）」とある。李善は注して「七發曰、波湧而濤起、横奔似雷。字書曰、迸、散也。瀼瀼濕濕、開合之貌。葩華、分散也。踧沮、蹙聚也。澒濘、沸貌。潗瀉、沸聲（枚乗の「七発」に「波濤が湧き起こり、思いのままに奔流して、あたかも雷がとどろきわたるかのようだ」とある。字書に「迸は散ることである」という。瀼瀼濕濕は、開いたり合わさったりする様子である。葩華は分散することである。踧沮は一ヶ所に集まることである。澒濘は沸きたつ様子である。潗瀉は沸きたつ音である。）」と言う。五臣（張銑）は「踧沮、澒濘、潗瀉、並蹙聚沸騰之皃（踧沮、澒濘、潗瀉はいずれも一ヶ所に集まり、沸きたつ様子である。）」と注する。以上を踏まえて「海賦」の当該部分を訳すと、「わき立つ波は雷のごとくに奔流し、逆巻く水は散っては集まる。開いては合わさり、ばらばらになっては一同に会し、また開いては合わさり、分散しては一ヵ所に集まり、激しく音を立て沸きたっている」という意味となる。

〔用例②〕威夷（wei1yi2・「威」『広韻』於非切／「夷」『広韻』以脂切）

潘岳「西征賦」（『文選』巻十）に「登崤坂之威夷、仰崇嶺之嵯峨。（崤坂の威夷たるに登り　崇嶺の嵯峨たるを仰ぐ）」とある。李善は「韓詩曰、周道威夷。薛君曰、威夷、險也（『韓詩』に「周の道は威夷たり」とあり、薛君の注に「威夷とは険しい様子である」という。）」と注する。これに従って訳すと、「崤山の険しい傾斜を登り、険阻な高峰を仰ぎみる」という意味となる。

〔用例③〕渟淡（ting2ying2・「渟」『広韻』特丁切／「淡」『広韻』烏迥切）

陽尼の「演賾賦」（『魏書』巻七十二「陽尼伝」引）に「越弱水之渟淡兮、躡不周之嶮巇。（弱水の渟淡たるを越え、不

周の嶮巇たるを躡む)」とある。注釈はないので、いま「渟淡」を保留にして訳すと、「渟淡たる弱水をわたり、険しい不周山を踏みこえる」という意味となる。

【結論】

木華「海賦」の「涾濘」が「激しく沸きたつ様子」を形容していることは、諸注のみならず、前後の波の描写からも明らかであろう。「甘泉賦」における「濎潒」も、類音語である「涾濘」と同義であるとすれば、無理なく本文を理解できる。

「濎潒」と対をなす「逶蛇」についても、朱起鳳の『辞通』(巻二・上平声五支)に同音異体の語が多数挙げられているが、その中に「険貌」を義とする一群があり、その中には前掲の潘岳「西征賦」の用例のみならず、「甘泉賦」の「躡不周之逶蛇」が引かれていることに注意したい。この「逶蛇」が、李善のいう「欲平貌」でないことは、もはや言うまでもないだろう。用例③に挙げた陽尼「演賾賦」の「越弱水之渟淡兮、躡不周之嶮巇」が「甘泉賦」の当該二句を模倣していることは一見してそれと分かるが、「逶蛇」を「嶮巇」に改めていることから、「逶蛇」が「険しい貌」と理解されていたことは明らかである。そうであれば、「濎潒」からは激しく波打つ動的な弱水のイメージを認めるべきである。「梁弱水之濎潒兮、躡不周之逶蛇」は、以上の考察を踏まえ、「沸きたつ弱水に橋を架けて渡り、険しい不周山を踏み越える」と翻訳されることが望ましい。

注

(1) 九四八年(日本村上天皇天暦二年)日鈔「漢書・揚雄伝」残本(『京都帝国大学文学影印旧鈔本』所収、一九三六年)。

(2) 『山海経』「大荒西経」に「西海之南、流沙之濱、赤水之後、黒水之前有大山、名曰昆侖之丘。……其下有弱水之淵環之」。

（3）『漢書』巻二十八下「地理志」金城郡臨羌県の原注に「西北至塞外、有西王母石室、僊海、鹽池。北則湟水所出、東至允吾入河。西有須抵池、有弱水、昆侖山祠」

（4）「鳳麟洲」に「鳳麟洲在西海之中央。地方一千五百里。洲四面有弱水繞之。鴻毛不浮、不可越也」。

（5）朱起鳳『辞通』九十五頁「巻十五・上声二十四迥項」（上海開明書店・一九三四年）。

（6）例えば『抱朴子』内篇巻十三「極言」に「不測之淵、起於汀澄（測り知れない深さの淵も、小さい水溜りから始まったのだ）」とあるものなど。